

# 学 位 論 文 要 旨

氏 名 小森 承子



論 文 題 目

「Retrospective evaluation of the feasibility of definitive chemoradiotherapy after treatment with docetaxel, cisplatin, and 5-fluorouracil in patients with esophageal squamous cell carcinoma」

(食道扁平上皮癌に対する DCF 療法後の根治的化学放射線療法の遡及的検討)

指 導 教 授 承 認 印

早 川 和 重



# Retrospective evaluation of the feasibility of definitive chemoradiotherapy after treatment with docetaxel, cisplatin, and 5-fluorouracil in patients with esophageal squamous cell carcinoma

(食道扁平上皮癌に対する DCF 療法後の根治的化学放射線療法の遡及的検討)

氏名 小森 承子

【背景・目的】本邦における II-III 期の胸部食道扁平上皮癌の標準的治療は術前化学療法後の手術であるが、臓器が温存できる根治的化学放射線療法(dCRT)も選択肢となっている。DCF 療法 (docetaxel, cisplatin, 5-fluorouracil) は頭頸部癌や胃癌で良好な治療成績が報告されており、近年、食道癌でも術前化学療法として注目されている。北里大学病院では、術前化学療法後に手術を予定している患者が DCF 療法後に dCRT を希望した場合、十分な説明の上で施行してきた。DCF 療法は毒性が強い治療としても知られるが、DCF 療法後の dCRT の報告は少ない。そこで、術前/導入 DCF 療法後に dCRT を行った症例について、その安全性と有効性を遡及的に検討した。

【方法】DCF 療法 (docetaxel:70-75 mg/m<sup>2</sup> day1, cisplatin:70-75 mg/m<sup>2</sup> day1, 5-fluorouracil:750 mg/m<sup>2</sup> day1-5) 3-4 コース後に dCRT (50.4Gy/28 回, 5-fluorouracil:1000 mg/m<sup>2</sup> day1-4, 29-32, cisplatin:75 mg/m<sup>2</sup> day1, 29) を行った II-IV 期の 17 例を対象として治療の安全性を、II-III 期の 13 例について有効性を遡及的に検討した。また、DCF 療法に対する反応と dCRT の効果との関連性についても調べた。

【結果】DCF 後に dCRT を施行した主な理由は、術前 DCF 後の手術拒否と手術不能例に対する導入化学療法後の病勢制御目的であった。17 例全例が dCRT を完遂できた。Grade 3 以上の主な急性期有害事象は、貧血が 41% (7/17), 好中球減少が 35% (6/17), 食道炎が 24% (4/17)であった。晩期有害事象として Grade 5 の放射線肺炎を 1 例 (6%) に認めたが、その他の Grade 3 以上の晩期有害事象は認められていない。II-III 期の 13 例のうち、11 例 (85%)が完全奏効した。完全奏効例は、全て DCF 療法に対する反応良好群であった。完全奏効後の再発 3 例と遺残 2 例の 5 例は全て救済手術が行われ、食道温存率は 54% (7/13)であった。II-III 期の経過観察期間中央値は 45 か月で、他癌死 1 例と放射線肺炎で死亡した 1 例を除き、無再発生存中である。

【考察】 DCF 療法では過去の報告と同様に強い毒性が見られたものの、DCF 療法後の dCRT の毒性は過去の報告と同等であり、全例で完遂することができた。この要因としては、DCF 療法後の腫瘍の縮小による症状の改善や適切な化学療法の減量、支持療法などが考えられる。また、DCF 療法後の dCRT の治療計画では、DCF 療法前の腫瘍を詳細に確認しながら標的体積を決定すること、docetaxel の有害事象として間質性肺炎があるため肺の照射線量・範囲を少なくすることが重要である。完全奏効割合は他の dCRT の報告と遜色なく、再発後も手術にて救済できている。個々の患者に最適な治療を提供していくためには効果予測指標に基づく集学的なアプローチが必要である。完全奏効した 11 例は全例が DCF に対する反応良好群であった。DCF に対する反応性が dCRT の効果予測の指標となる可能性があり、DCF 療法の治療効果に基づいて根治的治療を選択する多施設共同第 II 相試験を開始している。

【結論】進行食道扁平上皮癌に対する DCF 療法後の根治的化学放射線療法は実施可能であり、II-III 期において本治療法は、食道温存できる根治的治療の選択肢となる可能性が示唆された。